

地球的諸問題の解決——仏教の視点

スラク・シワラック

国連大学による努力

正直に事の本質を述べることから始めると、今日、地球的諸問題の解決のために真剣な仏教からの視点は示されていらないとはつきりと言わざるをえない。

バンコクに本部のある世界仏教徒連盟 (World Fellowship of Buddhists) は、政治、軍事、経済の問題に関わることを避けてきたし、人的協力の推進も行っていない。会員は十年ごとに集まり、我々仏教徒がいかに素晴らしいかを確認するだけである。

世界宗教者平和会議はジュネーブとニューヨークに本部を置き、仏教団体、とりわけ日本の立正佼成会からの強力な資金援助を受けているが、この組織は、地球的諸問題群に対して決議を行うだけで、仏教的視点から何ら重要な行動をしていない。実際、現代の仏教徒は国内、地方、教団のレベルにしか関心がないように見受けられる。

そうした仏教団体の中で、現在、地球的な課題を研究し、解決のために真剣に活躍しているのは、SGIの池田会長であり、その指導のもとにある創価学会、SGI

である。その諸活動はまだ世界中に広く知られるところまでは至っていないが、我々は池田SGI会長とSGIに多くのことを学ばなければならないと思う。

またアジア平和仏教者会議（ABCP）が、仏教と平和へのリーダーシップに関する国際セミナーを開催していることは、非常に喜ばしいことである。ABCPとともに、他の団体も地球的諸問題の解決のために仏教的アプローチの展開を推進する試みを続けてきた。たとえば、国連大学は現在、未来における望ましい社会についての仏教的構想に関するサブプロジェクトに援助を与えている。

一九八五年にバンコクで開催されたある会合で、多くの指導的な学者達と実践的な仏教者が集って検討したのは、宗教に関わる思想家と実践者がいかに当面する人類の苦境を捉えるかということであった。この会合の枠組みは三部門に分かれていた。（一）現在直面する諸問題の診断（二）これらの問題に対して与えられた個別的な仏教からの回答を検討すること（三）現在の状況からより望ましい社会へ発展していくことが、いかにして可能

であるかを考えてみることに。

この会合では、無関心、困惑、そして、自分本意が、世界の多くの人々がとらわれている絶望感の主たる原因であることが明らかとなった。これらが明確に宗教と関連しているということではないが……。ある時、フランス革命のスローガンであった「自由、平等、友愛」が議論された。四諦の法門（苦諦・集諦・滅諦そして八正道の修行を説く道諦）の代わりに、どうしてブッダはこれらの価値観を説かなかったのであろうかと。

今述べたフランス革命の三つの価値観は理想主義的である。ブッダは人間存在の現実——苦痛・喪失・苦悩・病氣・死——を受け入れつつも、それを乗り越えることを人々に教えた。こうしたアプローチは、現在の地球的な諸問題の解決に関わる人達のために、益するところ大であると感じた人も多かったようである。

バンコクでの会合のあと、国連大学では一つの小委員会を設置し、そこで未来におけるより望ましい社会に移行していくために仏教者が取り組むべき問題を明確にした。

福祉と開発

正義、公正、及び人権

平和、和解、及び非暴力

アイデンティティ、真正さ、及び普遍性

諸宗教間に存在する多くの相違は、しばしば相互に補完的な見解であり、対立するものとみなすのではなく、対話を通してより深く、より普遍的な地点に通じている相違であることを理解することが、重要である。このことが、宗教、制度、社会、国家のレベルで確実に実現されるべき重要なことである。

これらの相違は、宗教信条の違いを反映するものではなく、宗教思想家あるいは活動家が社会を内部から変革するために、社会の中に入り、その基底にあるダイナミズムを受け入れる立場をとるか、あるいは、社会の外側にあって、その価値観と制度に対する超越的な立場からの批判的見解を形成する立場をとるかの違いによるものである。

国連大学の努力が、我々の国際セミナーのテーマに極めてよく適合していると私は考える。

一、仏教における個人と社会

二、普遍主義と個別主義

三、より理想的な社会への移行を可能にするかもしれない社会的習慣

四、サンガ、国家、国民

五、仏教と社会の進化

六、仏教の終末論、至福千年説、及び仏国土

七、仏教の教育

八、仏教の戦争と暴力へのアプローチ

九、科学、テクノロジー、及び仏教

十、仏教における女性と家庭

国連大学ではこれらの問題についての小論文をまとめて出版物の形にしたいと考えている。

最近、国連大学は望ましい社会について考える同じテーマでのもう一つの会合をバンコクで開催した。しかし、この会合では異なった宗教的・倫理的体系に関するものであった。結論は次のようなものであった。

「我々は様々の異なった宗教の信条、価値観を以下の観点から簡単に概観した……」

転輪王の神話の理解と現在の地球的諸問題の解決への適用

イスラム教やキリスト教と違い、現代の仏教徒は地球的問題に対してビジョンを持っていない。これは、西欧の植民地拡大以前に仏教が多く、の宗派に分裂し、その全てが民族の文化、あるいは民族国家に帰属するようになり、その各派が更に分かれて各種の教団 (denominations)、セクトになっていったという背景にもよるのである。

一方、西欧のキリスト教は、ローマ帝国や大英帝国にみられるような大帝国の建設との関連から、普遍性あるいは普遍主義に基づいて白人が世界を管理する義務があるとする考えを發展させた。プロテスタンティズムは仏教のように各派に分裂したが、全ての相違を残しつつも、特に世界教会協議会の発足以来、共同して地球的諸問題に取り組む努力を行っている。

イスラム教の伝播は、特に古代ギリシャ文明の崩壊のあとに起こった、アラブの商業的成功と科学的知識とにも行われた。十九世紀にはヨーロッパ列強がオスマン

帝国にとって代わったが、中東におけるナシヨナリズム、汎ナシヨナリズム、そして経済的成功は、イスラム教徒達に地球的視点をもたせることになった。

南アジア及び東南アジアにおけるかつての仏教王国は、それぞれ西欧諸国から独立を回復したが、民族的特性としての仏教の「法」の精髓を喪失していた。これらの諸国が保持していたのは、仏教的というよりは封建的な国家に関わる諸儀式のみであった。現代社会には適合しない時代遅れの慣習に盲目的にしがみついているだけであった。シャム(タイ)は、政治的隷属は免れたが、知的、文化的、教育的な分野での事実上の植民地支配を被った。こういったタイプの植民地化の影響もまた、元に回復することは不可能である。

東アジアにおいては仏教は、西欧の影響が及ぶ以前からすでに儒教や神道の影響を受けてその本来の本質の多くを失っていた。崇高な仏教の精神は、アジアにおいて、個人あるいは人間的必要性が、物質的あるいは経済的利益に優先する地域という限られた領域でのみ保持されている。国家的レベルでは、ほとんどの人々が経済発展と

いうものさしで思考している。一方、金持ちはますます

金持ちに、貧乏な人は変わらないか、ますます貧乏になつていく。この現状は国家的にも、個人的にもそうなっている。そして、もちろんだれも幸福ではない。現在の社会発展の体制は、人権の侵害、富者と貧者の格差の拡大、環境の悪化、天然資源の仮借なき破壊を引き起こしている。残念なことに仏教的発展のモデルはいまだに確立されていない。そして、仏教諸団体からの対応は、これらの問題に対して十分ではない。

右記の問題に対処する前に、我々の仏教的伝統を検討し、社会正義に対するこのような地球的関心が過去に存在したかを振り返り、そういった関心を現在と未来において意義あるものとして生かしていくべきであろう。私見では、仏教の伝統を神話学的に考究し、王権及び全ての国民の幸福のために統治した君主について考え、神話がいかに後代の仏教徒の統治者達によって受用されたかを検討することは極めて意義のあることである。

『ディーガ・ニカーヤ』(長部)の『アッガンナ・スッタ』(Agganna Sutta)は、自然な極楽的な存在からなる理想

世界の描写から始まっている。永遠に自ら輝く衆生が至福の状態で生きていて、そこでは男と女、善と悪、富者と貧者、統治者と被統治者といった正反対のものの区別がない。大地自体がバターのように柔らかくて食べることができ、蜜のように甘い、素晴らしい物質で出来ている。

しかし、徐々に前世からの業により、この黄金時代も終焉が訪れる。世界とその衆生を見舞う長期にわたる崩壊の過程で、貪欲、強欲、性欲、窃盗、暴力、殺人が起きてくる。最後に、全面的な無秩序に陥り、この状態を終わらせるために、衆生は集まって、自分達の仲間から自分達を統治し、秩序を維持する王を選ぶ、これが選定大王(Mahasammata)選ばれた偉大なるものである。そして、君主としての役割をはたす返礼として、衆生は彼にいくらかの米を差し出すことに同意する。

これが最初の王権についての神話である。記録によると、転輪王あるいは世界君主の伝説もある。この伝説の基本的な話は、『ディーガ・ニカーヤ』(長部)の『チャッタヴァアッティ・シハナダ・スッタ』(Cakkavatti Sihanadā Sutta)は、自然な極楽的な存在からなる理想

nada Sutta) に出てくる。

この經典もまた、世界の輪廻の出発点である黄金時代の描写から始まる。この時期には、衆生は美麗な身体をしており、寿命は八万年で、素晴らしい、極楽の存在である。しかし、この話ではチャックラヴァルティン・ダルハネーミ (Cakravartin-Dallanemi) という名前の王が初めから登場している。実際、彼はその存在によってパラダイス的な状態の維持に貢献するので、黄金時代において大いに活躍することになる。彼は何が善であるかをわかまえ、法をもって統治したので、貧困、悪意、暴力、悪行は、彼の領土には存在しなかった。

伝統的に、転輪王は、特別な存在として描かれている。彼は偉大な人間 (Mahapurusa) としての三十二相を示し、君主としての印である七宝を賦与されているが、その中で最も重要なものは車輪 (cakra) であるといわれている。經典の中では、ダルハネーミの統治が始まる時、この素晴らしい車輪が彼の正当性を示すものとして、彼の前の空中に出現する。そしてこの車輪が、彼を導いて四つの大陸への、宇宙的ともいえる大征服におもむかせる。

話と同様に、この神話でもこの世界とそこに住む衆生の墮落の過程を描写する。

完璧な転輪王であるダルハネーミの王朝が長く続いたあと、法に従えない王が出てくる。そのような王には法輪も現れない。したがって、その王の統治に反抗する者も出てくる。摩擦が広がり、民衆も繁栄を享受できない。世界君主たるべき王も彼らを助けることができない。經典の中では、このあと次から次へと悪いことが起こる様子が説かれる。「困っている人に喜捨しないので、貧困が蔓延した。困窮が蔓延したので、泥棒が増えた。泥棒が増えたので、暴力事件もそれに歩調を合わせて増えた。暴力がはびこるので、殺生が日常茶飯事になった。殺人が多くなったので、衆生の寿命も美麗さも減衰した」この神話は、更に一国が無政府状態になるまでの、衆生の資質の劣化と寿命の短縮のあとをたどっている。この点で転輪王の神話は選定大王 (Mahasammata) の神話と非常に似ている。

これら二つの經典を比較すると、異なった結論を出すこともできる。前者の選定大王は、必要なときにのみ、

車輪は、彼を東西南北の方向に、そして諸の大海にまで至らしめ、車輪の行くところ、抵抗を受けることはなかった。車輪すなわち法輪に象徴される法の力によって、地方の王達が即座に服従するほどである。最後に、車輪は彼を導いて世界の中心である首都に帰還させると、まるで奇跡のようにそのまま王宮の上の空中に王権の象徴としてとどまる。

だが、満ち足りて、繁栄を謳歌する帝国の長年にわたる平和的統治が続いたあと、ダルハネーミの法輪も墜落を開始する。これは、仏教の無常の法によれば、彼の統治の終焉が近づいていることの予兆である。そして、法輪が地に落ちて消失すると、この賢王は王位を息子に譲り、世俗を捨てて森に住むようになる。

法輪が、一人の転輪王からつぎの後継者に自動的に引き継がれるのではないという事実は重要である。ダルハネーミの息子もまた自らの公正さによって法輪を呼び出し、自身がそれにふさわしいことを立証しなければならぬ。この事実は、この神話のあとの部分の展開を予測させる。すなわち前に述べた『アッガンナ・スッタ』の

出現を要請される。彼の役割は、無秩序状態が更に進むのを食い止めるために一時的に引き受けるだけで、本来、黄金時代に王は存在しないし、必要でもない。一方、後者では、統治者は黄金時代において非常に重要な役割を担っている。その存在と適切な統治によって、彼は万人に対し平和で、豊かで、素晴らしい生活を保証する。そして、彼が法輪にもとらず、公正であり、真に法輪を転ずる転輪王であるかぎり、この状態は持続する。

これら二つの神話から引き出せる結論は、どちらの神話も黄金時代では終わらず、統治者がしるべき振る舞いをしないときには、何が起こるかを明確に記述している。二つの神話は、統治者には二つのタイプがありうるということを示唆している。ひとつは、完全な転輪王で、公正かつ法に則って統治し、ダルハネーミのごとく、黄金時代を実現する。事実、『アングッタラ・ニカーヤ』(増支部)の中のブッダのことは、「世界君主、即ち公正にして、正しい王は、法に依存する。法を尊敬し、あがめ、称える。彼は、法を規範とし、人々に適切な福祉と保護を与える」とある。いまひとつは、おそらく真の意

味で転輪王の称号に値しない統治者で、公正でなく、法に則って統治することができない。そして、宇宙の破壊と世界の衰退をもたらす。

これら二つの神話は、南アジアと東南アジアの仏教諸国の君主に多大な影響を与えた。しかし、一般に流布している転輪王の概念から考えると、歴史的には、おそらく古代インドのアショカ大王のみが、実際に転輪王の名に値するのではないだろうか。彼はインド亜大陸の大部分を帝国の版画とし、可能な限り公正な統治を行った「世界君主」であった。シンハラ（スリランカ）やビルマやシャム（タイ）の王達は、実際には転輪王ではなかったが、彼らは全てアショカ大王に倣おうと、少なくとも理念的には、公正で正しくあらうと最大限の努力をした。だが実際に、彼らが「法を規範とし、紋章とし、主権とするその一方で、法を尊敬し、あがめ、称え、人々に適切な福祉と保護を与え」ていたかは、疑問である。

サンガの中央集権化と階層化を排して民衆の支持のある制度の下へ

縦横に分裂していった。多くの国々にあったサンガの各部門は、その発展を国家の保護に依存するようになった。僧院の富と所有地の増大によってサンガは社会の中へ組み込まれていった。すなわち、サンガは教師、祭司、呪文の誦者からなる僧侶階級、すなわち利己的な権益と途方もない文化的な権力を有する地主エリート階級となったのである。

サンガの中央集権化と階層化は、エリートと国家による支配をもたらし、非暴力の倫理を国家に適用するのではなく、サンガの中では、暴力と不正を合理化するような言説を弄する者が急速に増えていった。

一方、貧しく、教育程度も低い社会の底辺では、財産も家庭もない急進的な僧侶達がいて、非常に重要なブッダの教説を護持してきた。今日に至るまで、各地に散在する仏教徒の共同体は、官制の「国家仏教」——エリートの位階制及び世俗とのなれ合い、腐敗といった悪習——を根本的に無視するか、時には激しく非難する態度をとり続けている。

人類の未来を展望してみると、国家とそのエリート達

サンガ（男女出家者の神聖な共同体）の制度が發展して、法を統治者達に教えるようになり、統治者と被統治者の間のコミュニケーションを容易にする結果となった。在家の共同体と異なり、サンガは仏教の創世神話に説かれた人類の衰退の過程を逆行させる。すなわち強制を協力に、私有財産を非私有財産状態に、家族と家を男女半々の遊行者の共同体に、階層社会を平等な民主制に置き替える。サンガは、仏教哲学における手段と目的の一体化を象徴している。そして、紛争の解決に努力する運動組織自体が、平静で平和的なプロセスそのものとなっていなければならない。初期の僧院的サンガの戒律は、比丘同士あるいは比丘尼同士で起こりうる利害の衝突を平和的で民主的な解決のプロセスへと導いていくように企図されたものであった。彼らの社会の中に広範な平和と安定を確保するために、僧院的サンガは、国家の上に道徳的指導権を確立し、社会の福祉のために、非暴力の倫理規範で社会を指導していくとした。

しかし、約二五三〇年前のブッダの死以来、歴史上存在したサンガは、文化的、経済的、政治的つながりから

の利権獲得への傾向性を反省しつつ、その傾向を良い方向に向け、非暴力と民主と紛争の解決へのプロセスを実現していく、民衆の支持のある制度の下に収めていくことが要請される。伝統的な仏教の考え方は、王は常にサンガの影響下にあるべきであり、その逆であってはならない。

聖職者でない我々知識人にとって、ブッダのこの重要な教説を護持している急進的なサンガを援助していくことが、絶対に必要であると私は思う。我々は、地域の共同体をエリート達の独占とその消費主義から脱して自立させようとする、サンガの努力を全面的に支持すべきである。事実、多くの地方の農業社会は今も非暴力的な生活手段を有しているし、一人一人に対しても、また動物、木々、河川、山々に対しても尊敬観をもっている。

政府と多国籍企業は、様々な技術的な「進歩」と化学肥料を導入し、農村の人々に伝統的な生活様式を捨てて、ジーンズ、コカコーラ、ファーストフードを、更には国家とその好戦的体制を崇拜するように奨励してきたが、その営為も先鋭的なサンガの対抗的活動によって阻まれ

ている。サンガのいくつかは、農民達に瞑想の実践を復活させたり、多国籍企業と提携して地元住民を犠牲にする商業銀行ではなく、共同体所有の米穀銀行や水牛銀行を設立したりして、彼らの利益をはかっている。

我々は仏教の伝統の中における解放への潜在力を強化・発展させ、各地域共同体が地球的な視点を持ち、一人一人が地球的な諸問題、特に貧困の問題を考えていくようにすべきである。より多くの人々がこの問題を意識するようになれば、より効果的な解決も可能になるであろう。

我々はまた、仏教徒と非仏教徒が相互に交流し学び合っていくことを推進すべきである。そうすることによって、問題を生み出している抑圧的な社会勢力に対抗する共通の戦いにおいて、有意義な協力をする事ができるからである。我々はまた、農民、漁師、工場労働者、女性、そしてあらゆる国の抑圧された人々が、その信仰と文化的ルーツを発見し、そこから靈感と活力を得ることが出来るようにすべきである。

残念ながら過去の開発は、この人間的価値観の極めて

重要な源泉を無視してきた。実際、活動家は、不可知論的傾向を持つ者（神の存在は認識の対象にならないとして宗教を敬遠する者）であっても、様々な宗教、文化に内在する進歩的な次元に対して寛容であるべきである。もちろん、多くの活動家は反宗教的で、おそらくある種のドグマ、形式、儀式あるいは既成の団体に反対しているのであろう。しかしながら、Buddhism という言葉を先頭の文字を小文字にして Buddhism と書くことによって、特定の伝統への明確な言及はさけつつ、より大きな真正さへ個人を高め、戦いという世俗において精神性を発見し、発展・強化するのを助けることができる。

一方、地球的諸問題を解決しようとする多くの人達にとつて、社会工学的な考え方が有力になっている。この考えが前提としているのは、個人的な美德が、多かれ少なかれ急激な社会の再編成に影響を受けるということである。これと反対の見方は、根本的な社会改良が個人的な精神的变化をライフスタイルの変化に全面的に依存するということである。しかし、精神的価値を大切にすると人々も増加してきているが、その人達の認識は、内面

的な「仕事」が、個人的な誤解や恐怖から生じた社会状況によって大幅にやる気をなくしているということである。こういった中で、米国人で禅仏教徒の詩人にして活動家のゲリー・スナイダーの意見によると、いわゆる「自由世界」は、途方もない欲望の体制の中に経済的に依存するようになってきている。そして、その欲望は満たされることはない。性欲はとどまるところを知らず、怒りは自分におちまけるしかはけ口がない。このような状況の下では、精神的なライフスタイルは極めて分が悪い。特にホテル・インターコンチネンタルのような場所に住むか、滞在している場合には。一方、「社会主義社会」の方は、ほとんど例外なくいわゆる「自由世界」に加わりたいたいと思っているのである。故に、この悪循環は個人的にも社会的にも打破しなければならぬ。社会への関与をとまなう精神性が必要になってくる。

平和を創出する真理のダイナミックな開示

過去の社会的行動主義はほとんど「外にある」ものにとらわれてきた。「この内なる」ものを開き、それを他

者と分かち合うことは、安心感をもたらすが、それはまた当惑するような意識をもたらす。「私」はどれほど「私の」多忙さと「我々の」現実さと合理化そして「彼らの」悪意を必要としているか。活動家が、退屈さ、フラストレーション、無関心、怒り、敵意そして勝利主義（宗教の教義が永遠であるとする考え）に対して、熱中もせず、落胆もしないで、意識を持ち続けることだけでも、非常に大切な精神的実践である。しかし、これも日々の瞑想と定期的な俗界からの離脱との間で適切なバランスをとる、我々の外にある社会的病に思いをいたすことにより、可能になる。このような実践により、希望を育てるという自らの課題を徐々に解決し、状況が我々に要請することを積極的に実行していくことができる。

意識を深めることにより、受容が生まれる。受容を通して、一見奇跡的ともいえるべき精神の寛容性と、慈悲によって我々の中に生じる任務遂行への能力が生じる。我々は、自分自身のことだけを最優先して考えなくてもよい。この極めて重要な自己認識によって、我々は、様々な宗教・信仰をもつ他者を純粹に理解し、尊敬すること

ができる。我々は、この宇宙船地球号を平和で公正であるようにするために、謙虚に、相手をよく知りつつ、手を取り合っていくことすら出来る。仏教は全ての生命の相互依存を主張し、全衆生への慈悲、非暴力、全ての存在への思いやりを説いているので、現代の仏教徒達は、社会、環境、人種、性における公正と平和との関係をより広く、深い解釈を行ってきた。

この分野で我々は、スリランカにおけるサルボダヤのごとき運動や、更に生命の巨大な連鎖全体にも、また我々の行動の細かな点にも注意を払うように説く、ベトナムの僧ティック・ニャット・ハインの運動などにも勇気づけられる。彼は特にその教説の中で非二元論を強調し、世界における平和の実現への一環として自己の生活の瞬間において「平和であること」を説いた。内面と外面における連続性を強調し、世界を我々の「大自我」と呼び、我々が積極的にそれに合一し、それを大切にすよう求めた。

(ベトナム) 戦争中に創始された彼のティエップ・ヒエン教団は、日常生活と社会に關与する仏教の一形態で

ある。ティエップ・ヒエンの最も適切な訳語は、ティック・ニャット・ハインによれば、「相互存在の教団」である。これについて彼は次のように説明する。「私はある。故にあなたはある。あなたはある。故に私はある。これが相互存在である。我々は相互にあるのである」と。この相互存在を説く教団は、社会正義と平和問題について明確に発言しようとする。この教団に参加する者は鋭敏になり、自分の態度がより広い共同体の必要にそったものかどうか考えるようになる。そして、限定された行動パターンから自由になる。ティック・ニャット・ハインは、伝統的な五つの戒律を心・発言・身体の問題に修正した。

第一の戒律は「いかなる教義、理論あるいはイデオロギーを、それが仏教のものであったとしても、偶像化したり、それらに拘束されてはいけない。全ての思想体系は指導の手段である。それらは、絶対的真理ではない」このことを論じて、ティック・ニャット・ハインは「もしあなたが銃を持てば、一人、二人、三人、五人の人を撃つことができる。しかし、あなたがイデオロギーを持

ち、それに執着し、絶対の真理だと考えれば、何百万人の人々を殺すことができる」そして「平和は、我々が一つの見方に執着せず、狂信にとらわれないときにはじめて実現される。あなたがこの戒律を実践しようと決意すればするほど、より深く実在にせまり、より深く仏教の教えを理解するであろう」と述べている。

もう一つの戒律は、苦しみと接することを避けるのではなく、苦しんでいる人とともにいる方法を見つけよ。更にもう一つの戒律は、「何百万人の人々が飢えているときに、富を蓄積するな」これらの戒律は、社会正義と平和活動について意識し、優先するような態度を育てる。そして、この社会正義と平和活動は、仏教の諸原理にも、我々個々の存在においても、物事に思慮深くあるという実践においても深く根ざしたものである。七番目の戒律は、おそらく最も重要なもので、他の戒律もこの戒律を中軸にしているといえる。「環境によって、また気持ち散乱させて、自己を失ってはならない。心身の落ち着きを取り戻し、念慮を行い、専心と解了の力をつけるために呼吸法を学べ」

これらの指導のことばは、伝統的な五戒と八正道の要素を総合したものである。そして、ティック・ニャット・ハインが伝統的な戒律を洗練されたものにしようとしたのは、これらの戒律を勝手に解釈し、世間から逃避し、戦争と不正に直面して消極的になり、人間社会から自己を切り放すことの口実にする現実を目にしたからであった。戒律を書き直すにあたって、彼はそのような傾向に反対の方向を目指した。彼は、他者との相互連関に集中するよう我々に教示して、内的世界と外的世界の連続性を経験するよう要請する。また、正義を育て平和を創出する真理をダイナミックに開示していくために他者と相互に協力して行動するように要請する。

我々の中の幾人かの人々はこの挑戦を受けて立とうとしている。そして、この人達が内面の平和と外的世界を魅力的かつ意識的に結び付けることによって、達成しようとしているのは、社会正義と非暴力と生態学的バランスのあるよりよい世界の実現に貢献することである。この世界のなかでは、個人と社会全体において中道が実現され、一人一人が互いに仲良く、また自然とも調和を

とって生きていくのである。

更に、幾人かの人々は、地球的諸問題を具体的に解決するために、同じような考え方をする仏教徒の仲間に出会って、我々に近しく、大切な幾つかの問題を話し合おうと試みてきた。これらの問題について、我々は個人的に、また他の国々の異なった文化を持つ良き友人達 (kalyanamitta) とともに取り組んでいけると思う。そして、一九八九年二月、バンコク郊外の小さな町に全世界から、ABC Pからの代表を含め四十五人の仏教徒が集った。その目的は、

一、自国における緊急の社会問題、及び他の仏教共同体の問題を明確にする。

二、これらの問題に対して、参加者達が協力できる方法を検討する。

三、地球的レベルで、参画する仏教者達のネットワークを構築する。

参加者達は異なった様々な問題を検討するために、以下四つの作業グループを作った。

一、教育

二、女性問題

三、人権

四、精神性と行動主義

ここで、この(タイでの)会合について詳細に報告することは適当ではないが、あの会合以来、仏教者達が世界仏教徒連盟 (World Fellowship of Buddhists) やそれに類する諸団体の持つ欠点に気付き始めたのである。彼らは現在、参画する仏教者の国際ネットワークをつくりあげようと、強く決意している。その目的は以下の通りである。

一、仏教諸国と様々な仏教諸派との理解を推進する。

二、各国における諸問題の解決を容易にし、それに参画する。

三、これらの問題に対処する場合に、参画する仏教の視点を持つように援助する。

四、現在ある参画する仏教の(及び非仏教の)団体と活動についての情報センターとしての機能を果たし、どこであれ、様々な努力に対する調整作業に援助を行う。

彼らは、初めに以下の分野の団体及び個人を参画させる。

一、代替教育及び精神的訓練

二、平和活動主義

三、人権

四、女性問題

五、生態学

六、家族関係

七、地域開発

八、代替経済

九、コミュニケーション

十、僧侶と尼僧の関心事

これは将来更に広い分野に拡大される。

私は、この新たに設立されたネットワークが、仏教を世界的諸問題の解決に適用するにあたって、我々の主催団体と有意義な協力をする事になると確信する。

(本稿は、一九八九年八月十五日、ウランバートルで開催された「仏教と平和へのリーダーシップに関する第四回国際セミナー」における講演を基に加筆したものである)

(スラク・シワラック クレッド・タイ出版社社長、評論家)